後期日程

2025年度

<文　学　部>

小　論　文　問　題

注意事項

1　問題冊子は、監督者が「解答始め」の指示をするまで開かないこと。

2　問題冊子は全部で9ページ、解答用紙は全部で3枚、下書き用紙は2枚である。脱落のあった場合には申し出ること。

3　解答用紙の各ページ所定欄に、それぞれ受験番号（最後のページは、左右2箇所）、氏名を必ず記入すること。なお、解答用紙は上部で接着してあるので、はがさず解答すること。

4　解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入すること。

5　解答は、「横書き」にすること。

6　解答の字数制限は、句読点や記号を含めて数えること。

7　解答以外のことを書いたときは、該当箇所の解答を無効とすることがある。

8　問題冊子の余白は下書きに使用してもよい。

9　問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

（余　　白）

問題

次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

1

1934年12月、過度の飲酒癖により主治医から「死ぬか狂うか」という絶望的な宣告を受けたビルという男が、劇的な回心（注1）体験を経て断酒に成功した。その回心よりも約一か月ほど前に、ビルは同じく依存症者であった友人エビィ・Tの訪問を受けている。エビィは当時、「四つの絶対性」（絶対的な正直・無私・潔白・愛）を掲げるキリスト教系宗教団体である「オックスフォード・グループ」（以下、OGと略）に参加して、断酒に成功していた。ビルは自分よりも重症だと信じていたエビィが「信仰をもった」ことによって酒を断ったのを見て驚くと同時に、そのきっかけが宗教だったことにひどく幻滅する。エビィの話を聞いたビルは、「共通の苦しみを持つ仲間同士として、一人の依存症者がもう一人の依存症者に話をした」ことに衝撃を受けながらも、エビィの語る神をどうしても信じることができなかった。ビルは「他人が理解する神」によっては救われなかったのである。

エビィへの羨望にもかかわらず、彼が言う神を信じることができない絶望に苛（さいな）まれて、「神様、いらっしゃるなら姿をお示しください！　何でもしますから、何でも！」と泣きながら乞うたビルに、やがて劇的な体験が訪れる。ビルはそれを次のように記している。

> 突然、部屋が言いようのない白い光に燃え上がった。私は言語を絶する恍惚（こうこつ）感に襲われた。それは、それまで体験したあらゆる喜びが色あせるほどのものであった。光と恍惚感――しばらくの間、私はほかに何も意識することができなかった。次いで、心の目に山が映った。私は激しい風が吹くその山頂に立っていた。その風は、空気ではなく魂の風だった。大きく清らかな力で、その風は私を吹き抜けていった。そのとき、「おまえは自由だ」という燃え立つような考えが沸き起こった。どのくらいこんな状態でいたのかわからない。やがてようやく光と恍惚感が和らぎ、再び部屋の壁が目に映った。

この霊的体験を経て、ついにビルは断酒に至る。彼はこの体験において、アルコールに対する自己の完全な無力と自分を超えた大きな力への自己の委ねを知ったのである。彼の

体験に内在していたこのダイナミズムは後に、AAの回復プログラム（注2）である「12のステップ」の中の最初の三つのステップとして次のようにまとめられた。

一　私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。

二　自分を超えた大きな力が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった。

三　私たちの意志と生きかたを、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした。

さて、AAの誕生はビルのこの劇的体験と断酒ではなく、この後に起きたビルと「もう一人の依存症者」であるボブとの出会いの中にある。AAは稀有（けう）な霊的回心を体験したビルを中心とする宗教団体にはならず、その後、むしろメンバーの徹底的な無名性に、そしてメンバー同士の出会いと結びつきにグループの生命をかけることになる（AAの共同創始者であるビルとボブも、もちろんこの無名性の下にある）。

では、彼らの出会いにおいて何が起こったのか。それを考察するためには、先ほどの回心体験をしてからボブと出会うまでの半年間にビルがとった行動をくわしく見る必要がある。

2

回心体験の後、ビルは何が自分を酒から救ったのかと考え、当然のことながらその鍵がエビィの訪問にあったことに気づく。同じ絶望的な依存症者でありながら、信仰によって断酒に成功した回復の生き証人が現れたこと――「台所のテーブルをはさんで、奇跡が目の前に座っている」――これが自分の救いのきっかけであったことにビルは気づいていた。医者や家族がいくら手を尽くしても、また本人がどれほど努力しても果たせなかった断酒が、断酒に成功した別の依存症者の訪問をきっかけに成功したことは、彼にとって決定的な発見だった。この発見に高揚したビルは、今度はほかならぬ自分自身が第二のエビィとなって、同じように苦しむ者たちを救おうと奔走し始める。彼はみずからOGの活動に飛び込み、「ジェットエンジンに乗ったような勢いで、酔っ払い探しに取りかかった」。しかし、その後約半年間、ビルのこうした「援助」はことごとく失敗に終わった。

ビルに会って彼の体験を聞くことによって、ビル自身のように断酒に成功する依存症者は一人も現れなかったのである。①それはなぜだったのだろうか。

まず、この時のビルの行動を、それがなぜ「失敗」に終わったのかという方向から考えてみたい。後年、ビルは自分の失敗の理由に触れ、この時期の行動は本質的に「説教(preaching)」だったと振り返っている。だが、説教ではなぜ駄目だったのだろうか。たとえ説教であったとしても、実際の体験者が言うことであれば効き目があると考えるのが普通である。事実、エビィの訪問はビル自身に決定的な変化をもたらした。それなのに、形として同じことをしようとしたビルはなぜ失敗したのか。それを知るためには、ビルの「説教」の内実をもっと掘り下げる必要がある。

この時期、ビルは自分が体験したことをほかの依存症者へ伝え、それによって彼らを救うことが自分に「できる（I can)」と考えていた。ビルによれば、そこには無意識の「もう一つの動機」が隠れている。それは「ナンバーワンになりたいという昔の願望」だった。問題はこの願望そのものであるというよりは、むしろこの願望が彼の行動に致命的な矛盾をもたらしたことにある。なぜなら、1で見たように彼の回心体験の核心は、自己の完全な無力の自覚と自分を超えた大きな力への自己の委ねのはずだったからだ。この核心を他人へ懸命に伝えようとしていたにもかかわらず、この時彼が事実していたことは再び他人への「自己の力の行使」でしかなかった。彼が言葉として伝えようとしていたメッセージの核心（無力）と、彼の現実の行動（力の行使）との間には根本的な乖離（かいり）があったのである。無力（I cannot）を伝えるために力（I can）を行使する――ビル自身が振り返るように、「このような姿勢ではうまくいくわけがなかった」。これが、彼の半年の行動が失敗した理由である。

では、この時期のビルの行動は単なる力の行使でしかなかったのか。じつはそうではない。興味深いのはむしろこちらの点である。自分の行動には「ある種の双発型エンジン」があったとビルは振り返る。そのエンジンのひとつは先ほど述べた力の行使、つまり「ナンバーワンになりたいという昔の願望」だが、残るもうひとつのエンジンは「純粋な霊性(genuine spirituality)」だったと彼は言う。つまり、彼は自分の回心体験の核心にあったものが、失敗に終わった説教においてさえなお自分を動かしていたと述べているのである。ビルの偉大さは、自分の失敗の中に働いていたその力を悟り、この後見るように「もう一人の依存症者」であるボブとの出会いにおいて自覚的にそれを生きた点にある。AAというグループは、ビルがとったこの態度をボブが真正面から受け止めた時に誕生した。

この点を明らかにするためには、次にビルとボブとの出会いの直前へと時間を進めなければならない。

回心体験の半年後、株のブローカーであったビルは、再び仕事をするためにアクロンという町へ向かった。しかし、そこでの仕事は完全な失敗に終わり、仕事仲間は彼をホテルに残して立ち去った。失意の中ただ一人取り残されたビルは、再び激しい飲酒欲求に駆られる。ホテルのバーの懐かしい雰囲気が彼を誘い、「ジンジャーエールを注文し、誰かと話をするだけ」ならいいではないか、という囁(ささや)きが聞こえた。この絶体絶命の瞬間、ビルにもうひとつの奇跡が起きる。彼はこの時、たった一人で再び飲酒欲求と向かい合うと同時に、それまで半年にわたって行ってきた自分の説教が――対他的にはことごとく失敗に終わりながらも――自分自身にとってどのような意味を持っていたかを決定的に悟ったからである。これをビルは次のように語っている。

> 私は他人を助けようとしていたとき、自分自身が飲まずにいられたことを思い出した。その時はじめて、私は心底それに気がついた。「おまえには、話をするもう一人の依存症者が必要なんだ。その人がおまえを必要としているように、おまえがその人を必要としているんだ！」

ここでビルに起こったのは、誰かを助けるためではなく、自分が助かるために誰かと話をする必要があるという完全な発想の逆転である。この逆転はAA誕生のためのまさにコペルニクス的転回だった。しかし、この時ビルはこの逆転を新たに自分で創出したのではない。先の引用からわかるとおり、彼はこの発想の逆転が自分がそれまで行っていた説教の中にすでに潜在的に織り込まれていたことにあらためて気づいたに過ぎない。それにもかかわらず、この気づきはビルにとって決定的な転換点となった。なぜならば、この瞬間彼が気づいたものは先述のもうひとつのエンジン、つまり彼の回心体験の核心にあった「純粋な霊性」の働きだったからである。説教の背後にはもうひとつの動機が、すなわち純粋な霊性が存在していたのだ。ビルは潜在的に「自分が助かるためにはもう一人の依存症者が必要だ」と知っていたのであり、回心から得られたこの霊的直観が、その後半年にわたり彼を「もう一人の依存症者に話を聞いてもらうこと」へと無意識のうちに突き動かしていた。彼がこの瞬間アクロンで理解したのはまさにそのことだった。

自分の中にあるこの霊性の働きにはっきりと気づいたビルは、すぐさまそれを自覚的に

行動に移す。彼は、今度は紛れもなく自分自身のために「もう一人の依存症者」を捜し始めたのである。そこで彼が出会ったのがドクター・ボブだった。ボブは著名な外科医であったが、やはりすさまじい飲酒によって絶望の淵(ふち)に立っていた。じつは、ボブもまたすでに二年半もの間OGへ熱心に参加していた。ボブはこのグループで自分のアルコール依存症を告白し、親しい人々に苦しみを打ち明けている。熱心なメンバーがボブのために集まり、ボブの苦しみを分かち合って祈る時間も持たれた。しかし、こうした人々とボブ自身の必死の努力にもかかわらず、彼はなお断酒できなかった。それについて、ボブは次のように述べている――「何が悪いのかわからなかった。あの善き人々が私にしろと言ったことはすべてやった。私はとても忠実に、また真面目にやったと思う。それなのに、私はやはり酒に溺れ続けていた」。しかし、このボブは、見も知らぬ男であるビルの突然の訪問を受け、最初は15分しか話せないと言いながら約５時間にわたって共に話し続けた。その約一か月後である1935年６月10日、ボブの飲酒はついに止まり、これがAAの「誕生日」となったのである。

３では、「自分が助かるためにもう一人の依存症者が必要である」というビルのある意味で「利己的」とも言える態度について、それが純粋な霊性の現れであるという点に関してさらに考察を進める。

3

最初に自分が出会った時のビルの態度について、ボブは晩年のスピーチで次のように述べている。

> OGの人たちからは一度も聞いたことがなく、あの日曜日、ビルがはじめて私に教えてくれたこと――それは他人を助けようとすることである。

この「他人を助けようとすること」は、AAでは「サービス」と呼ばれる。「ビルがサービスという考え方を持っていたのに対して、私にはそれがなかった」ともボブは後に振り返っている。

だが、このサービスが決して利他的な意味ではないことにここであらためて注意しておこう。２で見たとおり、ビルのボブに対するサービスはあくまでもまずビル自身が助かるために行われていた。「サービス」という語がもつ通常とはちがうこの奇妙な意味は、ビ

ルのサービスを受けて断酒に至ったボブ自身の断酒直後の言葉にもはっきり表れている。ボブはビルに次のように提案する――「ビル、ほかの依存症者に関わっていくことが何よりも大切だと思うんだが。もっと行動的になった方がずっと安全（much safer）ではないだろうか」。ここにあるように、ほかの依存症者に関わって彼らを助けるサービスは、何よりもまず自分たちが「ずっと安全」になるために必要だったのである。

こうしたことから明らかなように、ボブがビルから教えられたという「サービス」は、あくまでも「自分が飲まずにいる」ために「もう一人の依存症者」へ「私たち自身の努力と力と時間をささげる」という、自分たちの断酒のための手段である。AAが掲げるサービスとは、通常この言葉から連想される利他的行為ではなく、まずはこのような興味深い「利己的」とも言える態度を意味している。

さて、この利己的態度は、先ほど見たようにビルが自分の説教の中に働いていた「純粋な霊性」に気づき、それを自覚的に行動に移した時にはっきりとその姿を現した。それゆえ、②利己的態度とは純粋な霊性の、すなわちビルの側からすれば自分自身の完全な無力の自覚の、直接的な現れにほかならない。このことを、彼の回心体験との関連からもう少し考察してみよう。

前節でくわしく見たように、アルコール依存症は「酒に対する無力」の、つまり「できない（I cannot）」の無自覚な表現としての一面をもつ。果てしなく繰り返される飲酒、酩酊（めいてい）、断酒のループは、「私は飲酒をコントロールできない」という命題の前言語的表現（注3）にほかならなかった。無力の自覚とはこの事実を正直に認めることであり、ビルの劇的回心もまた「私は飲酒をコントロールできない」という自覚的な無条件降伏である。この時ビルは自分の敗北を正直に認めて、飲酒問題に対する自分のコントロールをすべて手放した。つまり自分の死活に関わる問題を問題のまま自分の力の一切及ばない何かへと――「自分を超えた大きな力」へと――委ね、助かることも助からないこともそこへすっかり任せたのだった。

だが、ビルの問題はここで終わりではなかった。「できない」とは「ただ何もしない」ということではない。回心体験においてつかまれた「無力」は、これまでの無自覚な飲酒、酩酊、断酒のループとはまったく違う誠実な表現の形を必要とする。この「できない」という無力はつかみ続けられねばならないものであり、新しい自覚的な形で絶えず表現し直されねばならない。それが行われないかぎり、「できない」は古い歪（ゆが）んだループによって再び無自覚に表現され（これがアルコール依存症における「スリップ（再飲酒）」だろう）、真の回復は生じない。

事実、ビルは劇的回心の後、この「新しい表現」という問題に無自覚なまま（すなわち、彼が言うところの「最後の鍵」がまだ突き止められないまま）、ほかの依存症者を助けるために走り回っていたのである。この段階では、ビルの熱心なサービスは主観的にはまったく他人のためだった。彼は、エビィが自分にしてくれたと考えていたことを今度は自分がやろうとしていた。つまり、彼は依存症者の回復には自分と同じような回心体験が必要だと信じており、エビィが自分にそれをもたらしてくれたように、今度は自分がほかの依存症者に同じ援助ができると考えていた。ボブに出会うまでの半年間のビルは、「自分の問題はもう解決済みで、次は人助けだ」という自信に満ち溢（あふ）れているようにさえ見える。

しかし、そのビルの自信は、彼が無力の新しい表現という問題にまったく無自覚であったために、手痛いしっぺ返しを食らった。先ほど見た、株式の仕事に失敗したビルを襲った再飲酒の欲求がそれである。一旦はっきりとつかまれはしたものの、その後の自覚的な表現を塞がれた「できない」という無力は、再び古いループの形でこっそりとビルに忍び寄り、彼は「突然の恐怖に襲われた」のだった。この危機的瞬間にビルに起こったもうひとつの奇跡をここまでの考察に基づいて見直すなら、次のように言えるだろう。この瞬間はじめてビルは、回心体験で得た無力の自覚を新たに表現する必要性に気づき、しかもその新しい表現が探すまでもなくすでに自分に与えられていたことを悟ったのである。もう一度引用しよう。「私は他人を助けようとしていたとき、自分自身が飲まずにいられたことを思い出した。その時はじめて、私は心底それに気がついた」。

ここに述べられているとおり、ビルの「無力（できない）」は半年間、他人を助けようとする「サービス」としてすでに（しかしまったく無自覚に）表現されていた。ビルは自分に起こっていたこの変化に気づき、サービスが何よりもまず自分自身を救っていたことを認め、これを自分が飲まないためにもう一人の依存症者を助ける「利己的」態度として——あなたに話を聞いてもらわなければ自滅する無力なただの一人の依存症者である私が、自分自身を救うために今あなたに話しかけているという誠実な態度として——みずから表現した。つまり③「もう一人の依存症者」を心底求め、ボブを見つけてこの態度を示したのである。この時ついに、ビルの回心体験の核心にあった無力（I cannot）とそれを表現するビル自身の具体的な行動とがぴったりと一致した。利己的態度が純粋な霊性の現れであるとは、無力とそれを表現する態度とのこの見事な言行一致にほかならない。ビルという人物は、こうして自分がつかんだ無力を新しく自覚的に「生きる」ことを模索した最初の依存症者だった。

【出典：脇坂真弥『人間の生のありえなさ――〈私〉という偶然をめぐる哲学』（青土社、2021年）。傍点は全て原著者による。ただし、作問に際し、論旨を変えない範囲で部分的に改変した。】

（注１）　回心：神のような超越的存在に触れて心を大きく転換すること。

（注２）　AAの回復プログラム：アルコール依存症者のセルフヘルプ・グループ「アルコホーリクス・アノニマス（AA）」の主な活動であるミーティングでは、12段階からなる回復指針の下、依存症者が集まって互いの体験を語り合う。

（注３）　前言語的表現：感情や情報が言語化される以前に行動などによって表されること。

第１問　下線部①「それはなぜだったのだろうか」について、この問いに筆者はどのように答えているか。本文を抜き書きするのではなく、可能な限り、あなた自身の言葉で文を構成し、200字以内で説明せよ。（80点）

第２問　下線部②「利己的態度とは純粋な霊性の、すなわちビルの側からすれば自分自身の完全な無力の自覚の、直接的な現れにほかならない」について、利己的態度が純粋な霊性の直接的な現れである、とはどういうことだと筆者は述べているか。300字以内で説明せよ。（120点）

第３問　下線部③「「もう一人の依存症者」を心底求め」について、これ以前の本文では、ビルは自分が助かるためにもう一人の依存症者を必要としていた、と述べられている。では、このような原理によってアルコール依存症を克服しようとする人が、もし自分以外にアルコール依存症者を一人も見つけ出すことができなかったとしたら、その人はどうすれば良いとあなたは考えるか。その理由とともに500字以内で述べよ。（200点）